

# 朝日町エコミュージアムについて

## ～住民一人ひとりが学芸員～

安藤竜二

NPO 法人朝日町エコミュージアム協会

### 1. エコミュージアム憲章と朝日町エコミュージアム

#### (1) エコミュージアム憲章

おぼんです。NPO 法人朝日町エコミュージアム協会副理事長の安藤竜二と申します。よろしくお願ひ致します。Jecoms 理事でもありますので、まずはじめにエコミュージアム憲章でエコミュージアムのことを確認いたします。憲章にはとてもいいことが書いてあるのです。

まず、「定義」には、大切な目的が書いてあります。エコミュージアムは「地域社会の内発的・持続的な発展に寄与する」ことが目的です。押しつけによる一時的な発展にはありません。さらに、「住民の参加により、環境と人間との関わりを深める活動としくみ」とあります。環境だけではない「環境と人との関わり」を住民とともに探ります。ここもとても大切だと思います。

そして「対象」ですが、「地域の自然環境において成立した有形無形の生活・文化・産業の遺産や記憶・様式などを過去・現在・未来を通じて、総合的・統合的に」としています。一つのことだけではなく、様々な地域の宝を対象にするのです。

さて、次では三つの「活動」を表しています。

一つは「学校」です。エコミュージアムは住民にとって地域を学ぶ学校になります。地域を知る事により、地域に誇りや愛着が生まれ地域の担い手を育むと考えます。

ただ、誤解が生じたことがありました。運営母体の私達朝日町エコミュージアム協会が、住民に対して教育すると

勘違いして不愉快な思いをなさる方がいらしたのです。協会には確かに先生も数人所属していますが、私のような学歴もない男もいるのもっともなことです。しかも当時は、三十代の私が理事長を務めていたのです。「地域の宝に精通する住民の皆さんこそが先生で、私達協会はお手伝い役です」と、必死に説明しました。

次の「研究所」についても同じ誤解がありました。私達朝日町エコミュージアム協会が地域おこしや特産品開発の研究を、黙々と行っていると誤解されました。そうではなく、たくさんの宝の物語を知るエコミュージアムは、朝日町らしさを利用して何かをしたい住民誰にとっても、素晴らしい研究所になるという意味です。

三番目の活動として「保全機関」とあります。これも「何の権限があつて保全対象を決めているのか」とよく言われました。未だに開発と保全がせめぎあう時代ですからもっともなことです。朝日町には文化財保護委員会というのがあつて、そこで何を大切にするか検討されています。エコミュージアム活動で貴重だと分かったことについては、打診することはあつても、私達朝日町エコミュージアム協会には権限はありません。むしろ、エコミュージアム活動により、地域の宝が地域の人達の、本当の心の財産になっていくことに大きな力を感じています。

最後の「しくみ」には、住民が主体となって行政や地域の様々なセクターと協働すると書いています。朝日町エコミュージアム協会だけの活動はありえません。必ず、対象となる宝に関わる団体や地区と一緒に活動しています。

## (2) 朝日町エコミュージアムの理念

朝日町では、平成元年に策定された第三次総合開発基本構想において、「わが町に住む人々が、それぞれがこの町の文化、自然、生活に誇りを持ち、活かしながら、楽しく生き活きと暮らせる生活スタイルの確立を目指す」と掲げました。国を挙げて都会や新しい生活を目指していた高度経済成長時代に、田舎の朝日町の住人は時代に取り残されたようで、町に誇りを持っていない人が多かったのです。私は特にそうでした。そこで、エコミュージアムの考え方が起用されたのです。

翌年、発足したてだった前身の朝日町エコミュージアム研究会（西澤信雄代表）が中心となり「朝日町エコミュージアム基本構想」を策定しました。私はまだ二十代でした。そこには「エコミュージアムは、朝日町民にとって見学者であると同時に出演者であり、町はまるごと博物館になり、住民は誰でも学芸員になる」そして「町を町民がよく知り、そのことにより、誇りを持って生活できる町づくりをする」とうたっています。「自然と人間が共生し、しっかりと暮らしを築く」ことを理念に掲げ、「町全体が博物館 住民一人ひとりが学芸員」を大切なキャッチフレーズとして使ってきました。この「住民一人ひとりが学芸員」という考え方こそが、朝日町エコミュージアムを培ってきた重要なポイントと言えます。

---

## 2. 朝日町エコミュージアムの概要と活動

### (1) サテライトの概要

朝日町エコミュージアムでは、16 エリアにサテライトを分けています。但し、サテライト内の住民活動は、けっしてエコミュージアムに属するものではありません。このエリアの中に様々な宝があり、毎年何か一つにテーマ（対象）を決めて活動をしてきました。エリアの特長を大まかに説明いたします。

まずは母なる山の大朝日岳エリアです。磐梯朝日国立公園の朝日連峰の主峰が朝日町のとっぺんです。朝日連峰の原生自然の面積は日本一広いそうです。町の面積の7割以



写真1 大朝日岳山麓の朝日町

上は山林で、ブナ原生林を登る登山に多くの人が訪れます。

朝日川エリアです。大朝日岳から流れる朝日川での川遊びや溪流釣りは、かけがえのない私の原体験です。夏には東北最大級のヤマメつかみ取り大会が開かれます。

この朝日川と最上川が合流する所に、朝日町は広がっています。河岸段丘の肥沃な大地ではりんご栽培が盛んに行われています。人口は昭和30年代の16000人をピークに減り続け、社会減に自然減も加速し現在は8000人を切ってしまいました。エコミュージアムで町の魅力を浮き彫りにしても、残念ながらそのスピードにはかないません。朝日町には駅がないことも大きな一因だと思います。

五百川峡谷エリアです。最上川の最も狭窄部です。白い波の立つ瀬が連続しますが、これが様々な利点をもたらしています。上流の米沢盆地で汚された水を自己浄化したり、激流好きなカヌー愛好者達のたまらない流れだったり、鮎が大きく育ったり。ちなみに大きな鮎のことを朝日町では巨鮎と言います。水がきれいなので餌の藻が豊富で30センチ以上に育つ鮎がたくさんいるのです。手応えを求めた友釣り師達に人気です。でも味も大味だそうです。(笑) また、ここは舟運時代の最大難所だったので、米沢藩が川底を25kmにわたって掘った舟道遺構があります。近代土木遺産に選ばれたコンクリートアーチ橋「明鏡橋」から、湧水するとよく見えます。

八ッ沼エリアです。ここは七不思議伝説のある遠野みたいな所です。戦国時代の城跡も明確に残っています。小さな集落ですが、4年に一度、春日神社の大祭で大行列が行われ、多くの人で賑わいます。

そして、大沼浮島エリアです。葦の小さな島が湖上を風

に関係なく動き回ることがあり、国の名勝になっています。かつての山岳信仰の拠点で、源家、徳川家、最上家の祈禱所でした。義経や弁慶が滞在した伝説もあります。

榎平の棚田エリアです。戦時中に中学生達が食料を作るために開墾した田圃です。棚田百選にも選ばれ、現在は朝日町で一番の観光地となっています。隣接する一本松公園には、ヒメサユリ保存会の皆さんが、昔の風景を取り戻すために何年も苦勞なさき見事な花を咲かせています。

秋葉山エリアです。麓に広がる大谷地区は、左遷された菅原道真の側室一統 20 世帯が移り住んだ集落と云われ、基盤の目のような町わりに天神様が四つもあります。江戸時代のご朱印寺社もなぜか八つもありました。

そして空気神社エリアです。「日本は八百万神の国なのに、感謝すべき空気の神様がいないのはおかしい」という 40 年前の一人の町民の提案を、各戸から寄付を募り平成 2 年に形にしました。自然と共生する朝日町のシンボルとなっています。



写真 2 空気神社

町の中心部にあたる豊龍神社エリアです。こんな山奥の町なのに、円仁の弟子がなぜか豊玉姫を祀りました。境内には天然記念物の大杉もあります。

佐竹家住宅エリアです。江戸時代の大庄屋の屋敷で国指定重要文化財になっています。米沢藩の舟運差配役をしていたお家柄です。周辺には町の文化財の十一面観音や最上家や上杉家に攻略された山城もあります。

館山エリアには、薬師堂がありますが、こんな小さな集落になぜか古い時代の如来像があり、さらに脇侍の日天・月天、さらに十二天も揃っているのかと不思議がられています。ここは養蚕が盛んだつたため屋根構えの大きな家が

残り風情ある町並みとなっています。

ちなみに、先ほどの大朝日岳山麓の森では、私の実家で蜂蜜を収穫しています。蜜源樹のトチがたくさん自生しているのです。私の職業の蜜ロウソクは、この時に採れる不用品部分で作られたミツバチの巣が材料です。日本ではじめての専門工房として 25 年前に開業しました。さらにその自然に育まれたミツバチ達は、町の一大産業であるりんごの花粉交配の仕事もしています。

これは朝日町ワインの工場です。朝日町で栽培された葡萄で作る事にこだわり、ここ数年、国産ワインコンクールの様々な部門で上位入賞しています。今晚の懇親会のために、1 本お持ちしましたので味見して下さい。

## (2) 活動 1. 調査事業

では、私達朝日町エコミュージアム協会が、具体的にどのような活動をしているかについて説明致します。博物館のプライドを持ち、大きく調査事業・普及事業・運営事業に分けて活動しています。資料の表をご覧ください。以前にこれまでしてきた活動を分類してできる活動を整理したものです。実は、いろんなことをテーマに併行してやっていたことがあり、それぞれが中途半端になってしまったことがあったのです。そこで、テーマ(対象)を決めたら、何ができるかを参考にするための表を作ったのです。もちろん、活動はこれのみに限るものではありません。

これはエコミュージアムルームです。一人の職員が常駐しています。見学者の窓口ですが、普段は調査・普及活動の拠点です。すぐ隣には、図書館があって町に関わる本のコーナーがあり、調べものなどで活用しています。

そして、ルームの後ろに見えるガラスの扉を開けると、教育委員会の歴史編纂室になっています。ここには、校長先生を退職した朝日町エコミュージアム協会の理事長も務めています。エコミュージアムは、教育委員会抜きでの活動は考えられません。何十年と培ってきた学術的データのおかげで、私達の活動が成り立つのです。度々、扉を開けて教えていただいています。

光を当てる活動テーマ(対象)が決まると、一番始めに頼るのが、重たい「宝投稿ファイル」です。これは二度のキャンペーンで集めた町民が思う朝日町の宝の投稿ハガ

キです。朝日町のことなら物でもエピソードでもなんでもいいので教えて下さいと呼びかけました。全部で 1000 件の宝がストックされています。たとえば、五百川峡谷をテーマにした時は、ここから関係あるハガキをピックアップして目玉となるようなことはないか？何の取材をするべきかなどを参考にしました。全てではありませんが、町民が寄せてくれた宝が、私達の活動の大切なデータペースとなっているのです。このファイルこそが朝日町エコミュージアム協会の宝です。



写真3 宝投稿ファイル

そして、基本は「聞き書き」取材です。「住民一人ひとりが学芸員」として宝に精通する方のお話をうかがいます。

これは雨ごい地蔵について取材した時の写真です。先ほどの浮島のある地区では、干ばつになると大沼にこの木彫りの地蔵様を放り投げる儀式があったそうです。別当をしているこのおじいさんが子供の時に最後の儀式があったそうで、見事に嵐となったそうです。ところが増水した波間に地蔵様が消えてしまいました。ある日、浮島の一つが茶屋の主人の前に近づいてクルクル回ると、すーっと対岸に移動し止まったそうです。そこに潜ってみたら地蔵様が引っかかっていたそうです。こんな素敵な話を聞く事ができました。朝日町エコミュージアムでは「住民に教える」のではなく、「住民に教わる」をモットーにしています。

近頃は、デビューしたての「あっふるニュー豚」の試食会を兼ねて、開発者である産業推進機構の菅井正人さんから誕生の経緯や苦労話を聞く勉強会をしました。そして、ブナ林帯に位置する朝日町だからこそ養豚に向いていて、ストレスを与えずリンゴを食べさせることにより、臭いの

ない脂の甘い豚肉になることを教わりました。このように、エコミュージアムは古い物だけを取り上げるのではなく、新しいものにも光をあてています。従来の博物館が後ろ向きの保存型過去指向博物館なのに対し、エコミュージアムは生活型未来指向博物館だと、協会理事の西澤信雄さんは言っています。

そして、聞いたことはテープ起こしをして文章にまとめ「エコミュージアムノート」に編集します。聞き書きの文章は雑誌のようにライターの私感を入れて書くのではなく、なるべくその方の口語体になっています。必ずその方のプロフィールも入れます。あっふるニュー豚の菅井さんの話もまもなく文章にまとめられます。

一つのテーマでこのエコミュージアムノートが貯まると、「エコミュージアムの小径」と題した小冊子のガイドブックに編集して保存されます。パソコンにも保存します。



写真4 雨ごい地蔵

### (3) 活動2. 普及事業

普及事業は、これまで様々な方法を試みました。地域の宝が住民の財産になるよう、ここでも「住民一人ひとりが学芸員」にこだわり工夫してきました。

これは先ほどの、聞き書きした文章のエコミュージアムノートです。これは「エコミュージアムルームだより」の裏面に印刷して毎回全戸配布されます。ホームページにも随時載せています。アップルニュー豚の話もまもなく全戸配布され、町民にその魅力が共有されます。

そして、それらがまとめられた「エコミュージアムの小径」のガイドブックは、関係団体や地区、学校に配り、郷





写真 5 □ガイドブック

土学習の副読本となります。販売もしています。これまで14集作ることができました。扉を開けると室に精通する多くの町民が語りかけてきます。残念ながら亡くなられた方もたくさんいますが、未だにこの本の中では「住民一人ひとりが学芸員」として活躍下さっています。

これは、エコミュージアムコーナーに展示するための「宝パネル」です。先ほどのエコミュージアムノートと同じ文章ですが、きれいな写真を使って大きく表すことができます。幸いな事に、現在の安藤美智子さんをはじめ、職員は代々デザインに長けているので、あか抜けた立派なパネルを作ってもらえます。聞き書きした皆さんのお話をきちんとしたデザインで展示するのはとても大切なことと捉



写真 6 宝パネル

えています。4枚の展示フレームがあるので毎回4人の方のパネルが展示されます。コーナーを通った人が「今度は〇〇さんが出ている」と、驚いて読んでいって下さいます。また、コーナーの隣にはギャラリーがあるので、企画展の時は利用しています。

シンポジウムも度々開いています。この写真は、明治15年建築の木造校舎「三中分校」のシンポジウムです。小さな学校の小さな講堂を会場にして片寄せ合って開催しました。朝日町にはエコミュージアムコアセンターという立派な建物があるのですが、こういった催しは必ずその地区で開催しています。そして、その地区やテーマに関わる団体と一緒に開催しています。教育委員会やエコミュージアム案内人の会とも共催します。



写真 7 三中分校でのシンポジウム

この時は、建築を専門とする東北大学の名誉教授の講演のあと、地域教育の歴史を専門とする山形大学の先生、区長、地区の歴史に詳しい方、祭りに詳しい方、地元風景を映像に残す活動をしていた女子高校生でディスカッションしました。教授以外は、皆さん三中分校の卒業生です。このように、シンポジウムでも「住民一人ひとりが学芸員」として、学者者だけでなく地元の精通する方とともに地域の魅力を明らかにする作業になるようにしています。地区の方が出るということで会場も満員となりました。ちなみに、この高校生は大学卒業後に帰郷して朝日町エコミュージアム協会に入会し活躍してくれています。

「ワークショップ」もいろいろやってきました。この写真は、青苧の糸とりです。朝日町の青苧はかつて「五百川苧」という有名ブランドで、奈良さらし、越後縮、近江蚊

帳などの原料として、戦後まで収穫し出荷されていました。この時は、朝日町でただ一人糸採りを続けていた 90 歳の和田新五郎さんに講師になっていただきました。残念ながら和田さんは翌年にお亡くなりになりましたが、一連の作業は映像に収めていたので、青苧をやってみたいという人にはその DVD を購入していただいています。



写真 8 青苧の糸とり体験

これは、五百川峡谷を川下りした時の写真です。美しい風景の中、カヌー愛好家の皆さんの協力のもと、地元の自然の専門家と参加者が一緒に下りました。普段できない川下りの魅力を満喫しながら、断崖の自然が生き物たちのサンクチュアリになっていることを実感しました。

これは「朝日町エコミュージアム案内人の会」です。最も住民学芸員として活躍下さっている皆さんです。先ほどのシンポジウムやワークショップで共有した朝日町の魅力をガイドに活かして下さいます。郷土学習したい方や、観光でいらした方を、得意な分野でエコミュージアムのガイドが案内しています。例年 40～50 団体 1000 人前後の皆さんを案内しています。近頃は、だいぶ高齢化してしまい若いガイドの確保に苦労しています。

ただ、エコミュージアムガイドは、案内人だけでなく、聞き書きなどでお世話になった精通する住民の皆さんにも「講師」として頼る二重方式でやっています。案内人が現場に見学者を案内し、そこで講師の方にお話をいただきます。案内人はそこで必ず「本日忙しい中、時間を割いて説明して下さいます」と、きちんと紹介します。案内人が説明できない専門的なニーズがたくさんあったことと、「住民一人ひとりが学芸員」のコンセプトを考えて、

いつのまにかこのパターンがあたり前になっていました。見学者の皆さんも、精通する方の生の声が聞けたと好評です。ここには、大切にしていることを「話す喜び」と「聞く喜び」があるようで、とてもいい交流観光になっているようです。何度も講師をして下さっている方は、簡単なおみやげを準備して下さいます方もいます。

ただ、多くの案内人や住民講師の皆さんに活躍していただきたいところですが、その方の得意分野にニーズがないと頼めません。どうしても人気の観光スポットの案内人のみ忙しい状態です。そこで「朝日町ふるさとミニ紀行」と題して、案内人が得意な分野で自ら企画する見学会を月に一度の割合で催しています。参加者が少なくてもよしとする小さな見学会です。案内人が住民講師を頼んで一緒に案内することもできます。今年は、アップルニュー豚の見学会も菅井さんを講師に開く予定です。

それから、ミュージアムグッズとして、町の宝物を紹介する「エコミュージアムかるた」や「紙芝居」「DVD」も作りました。特にかるたは、各地区の宝を紹介しているのでやってみると大変盛り上がり、楽しく町の宝を学べる優れたものです。

これは「エコミュージアムルームたより」です。催しのお知らせや報告、案内した報告などを載せて全戸配布しています。お世話になった皆さんのお名前をなるべく載せるようにしています。

三年程前に、新しい取り組みを始めました。「QR コード案内システム」です。こんなふうに見学場所に QR コードを貼り付けています。これを携帯電話で読み取りホームページを開けば、案内人がいなくても、詳しい説明を読む事ができます。観光協会の飲食店情報ともリンクしています。人と人の交流がないと否定的な意見もありますが、ホームページには 20 年以上の蓄積が 600 ページ以上に紹介されており、聞き書きした住民学芸員の皆さんのお話もたくさん読む事ができます。案内人の依頼は、団体やグループが主なので、個人で訪れた方が活用してくれたいなと期待しています。それに、朝日町を訪れなくても朝日町をめぐる事ができます。活用されているかどうかは把握しようがありませんが、ホームページそのものは毎日 1000 ページ以上閲覧されています。





写真9 QRコード案内システム

#### (4) 運営事業

エコミュージアムルームは、町から朝日町エコミュージアム協会が受諾して運営しています。そのほか、正会員や賛助会員の会費、寄付金、助成金、ガイドブックやかるたなどグッズの売上などを活動費に充てています。

ボランティアの項目がありますが、催しそのもののスタッフを募集する事もあります。地域のみなさんや関係団体と共催すること、案内人や講師によるガイド、私達協会活動を含め、朝日町エコミュージアムのシステムそのものが住民のボランティアで成り立っているといえます。

### 3. 朝日町エコミュージアムの成果

さて、最も期待される成果についてお話いたします。憲章にうたわれているように地域の内発的・持続的な発展にどう寄与したかですが、正直なところ分かりません。量り用がありません。ただ、五百川峡谷にフットパスを作る時は、エコミュージアムで見つけた魅力を活かして整備やルート作りが行われました。10年以上前に発足して活躍している「大沼浮島雅楽保存会」の皆さんは、エコミュージアムがきっかけだと言って下さいます。ですから、これらはいくらか成果と言ってもいいかなと思っています。

雅楽保存会のように、エコミュージアムの取り組みがうまくいった後は、確かに何かが始まることが多いことは実

感しています。たとえば、地酒の豊龍に光を当てた時はファンクラブ「豊龍蔵の会」ができ、特別なお酒を毎年購入できるようになりました。五百川峡谷の時は、翌年からカヌー愛好家の皆さんで毎年ごみ拾いイベントを行っています。一冊の詩集を出して27歳で亡くなった詩人に光を当てた時は、詩を読み解く会ができ朗読CDができました。ハッ沼の七不思議伝説を伝えた人形劇は、そのまま結成され活躍なさっています。また、たとえば宝周辺の草刈りや道整備などは、地域の人達でまめに行われるようになることも実感しています。手作り案内板が建つこともあります。

しかし、それらはあくまで住民がこれまでの経験を元に、住民の意思で生み出した住民の成果です。エコミュージアムがきっかけとなったかも知れませんが、けっしてエコミュージアムの成果ではありません。私は、エコミュージアム本体の博物館としての成果は、あくまで「知らなかった環境と人の関わりを一つずつ住民の皆さんと明らかにしてきた蓄積」まででいいと思っています。

いっぽう、エコミュージアムの活動の中で、何か地域おこしの媒体を積極的に生み出し住民に提案すべきという論調もあります。でも、そうすれば成果は住民の物ではなく提案者のエコミュージアムのものになってしまいます。吉兼秀夫会長の名言にもあるように「自文化を自分化」することには繋がらなくなってしまうと思うのです。

私は、エコミュージアムの成果が、なにか住民生活に知らぬ間に活かされていたらいいないつも思っています。あるいは、朝日町らしさを活かして産業推進機構があっがるニュー豚を開発したように、めざとくエコミュージアムの成果を利用して、新しいものを生み出す住民がさらに現れるのも期待しています。エコミュージアムの成果こそ「住民一人ひとりが学芸員」のもと培った住民の成果なので、これが私の期待する「エコミュージアムの町作り」です。

大原一興前会長の著作本『エコミュージアムへの旅』（鹿島出版会発行）に、世界中のエコミュージアム実践者の言葉が紹介されています。そこで私は、座右の銘とも言える素敵な言葉を見つけました。シグブリット・ウィルヘルムソンという方の「エコミュージアム自身は何物も所有しないし、何物も新たにつくらない。つくるのは地域住民」と

いう言葉です。また、ピエールメランという方は「エコミュージアムは触媒の役割。つまりエコミュージアム自身は変化しないが、他者が自ら変革することを促す力を持つ」という言葉です。10年程前からこの言葉をエコミュージアムルームに掲げて活動しています。

最後に、面白い後日談があった取り組みを紹介します。最上川最大の断崖絶壁「用の明神断崖」は、川を挟んだ隣の大江町にあるのですが、それは朝日町からでないと思われられない名所となっています。この用地区と向いの朝日町船渡地区はこの明神断崖に棲んでいるという竜神信仰があった地区です。どちらの神社にも竜の絵馬が飾られています。この断崖に登る見学会を開催した事がありました。実は参道の山道が笹藪になり、倒木が遮っていて、その整備に私達は一日掛かりました。当日は、朝日町側の案内人や講師と、大江町用地区の区長さんや年輩の歴史家の齊藤高治さんにも講師をお願いしました。齊藤さんには頂上の巖島神社（旧弁財堂）でたっぷりお話いただきましたが、さらにその後の芋煮会の時も、止まらずたくさんお話下さいました。私達も引き込まれて聞きました。竜神信仰の地に相応しく雨降りの開催でしたが、大変あたたかいものを感じた見学会となりました。



写真10 案内人と住民講師の齊藤氏

さて、後日談ですが、用地区では齊藤さんを講師にして地区民を対象にした歴史勉強会が開かれました。あの参道の山道は、毎年きれいに道整備がされています。さらに、縁の下が見えていた神社の床板は張り替えられ、透明の波トタンで雪囲いもきれいになされていました。地区の会議では、登山口の看板を立てようと盛り上がったのですが、

貴重な絵馬等もあるので見合わせたとのこと。

もちろんこれらのことは、エコミュージアムとは関係ない用の皆さんの成果です。でも正直なところ、あの見学会がきっかけになったとしたら嬉しいなと思っています。

そして、これにはもう一つ後日談があるのです。見学会から四日後の朝のことです。私は明神断崖にかかる竜の形の雲を見つけて写真に収めることができました。この写真です。この姿はあの絵馬の口を開けた白い竜とそっくりです。地元でちょっとした話題になりました。この写真を齊藤さんに見せた所、大変喜んで下さり、お祭りの時に神社に奉納して下さいました。その時、私は思いました。エコミュージアムは、地元の人を元気にするだけでなく、地元の神様まで元気にしてくれるものではないかと。(笑)



写真11 竜の雲と明神断崖

まとめになりますが、ハチミツがたくさん採れるトチノキに花が咲くには15年かかります。花が咲いても少しなのでミツバチ達はなかなか訪花せず、実もわずかししか実りません。しかし地道に養分を吸い、幹を太らせれば、しだいに花もたくさん咲かせられ、ミツバチを喜ばせます。1日で20kgも蜜を出すそうです。そして実もたくさん実り、森の生き物達を喜ばせます。エコミュージアムの活動も「住民一人ひとりが学芸員」のコンセプトを大切な養分にして、年輪を増やせば増やす程、実りも多くなるものと私は確信しています。これからの朝日町にどうぞご注目下さい。本日は拙いしゃべりを聞いて下さりありがとうございました。

「エコミュージアム研究 No.18」2013.5.31

日本エコミュージアム研究会 発行